

北海道山越郡八雲町の士族移民について

原 誠

1. はじめに

明治維新以後、政府は封建的制度の撤廃と近代化を強力に推進した。しかし、特権を剥奪された士族は多くが没落していくこととなり、士族授産が必要とされた。このためその多くが北海道開拓に活路を見出して海を渡っていった。彼らの多くは移住後も士族としての誇りを持ち、旧主君との主従関係を保ちつつ開拓に邁進した。本稿では、士族が故郷と生活環境の異なる北海道に移住してどう適応したかについて、旧尾張藩士が開拓した北海道山越郡八雲町で行った調査をもとに明らかにしたい。

1869年、新政府は開拓使設置とともに蝦夷地を北海道と改称し、北海道開拓を強力に推進しようとした。この背景にはロシアの南下に対する懸念があり、北海道を開拓することでその不安感を払拭しようという意図があった。また、北海道の豊富な資源は魅力的なものであった。

開拓使は設置当初から積極的に移民を募集して北海道への定住を促した。しかし北海道側の通信・交通網の整備が未発達であったため、移住に応じる農民は少なく、この時期の北海道移民は生活に困窮して移住を余儀なくされた士族が中心であった。

士族移民は大きく分けて、①初期の北方防備の性格の強い幕末維新動乱関連の移民、②中期以降の北方防備と士族授産を兼ねた屯田兵、③後期の士族授産の性格の強い移民、の3種類があり、本稿で取り上げる旧尾張藩士の移住は③のタイプに当たる。旧尾張藩士の移住は旧藩主が出資して旧藩士授産事業として北海道開拓に着手させる方式であった。

2. 北海道山越郡八雲町の概要

北海道山越郡八雲町は函館の北約70キロの内浦湾沿岸にある町である。太平洋側から日本海側各地を結ぶ幹線道路を分岐する交通の要所に位置していることから都市基盤がよく整備されており、渡島半島北部の中核都市的な役割を果たしている。

八雲という地名は、旧尾張藩主徳川慶勝が名づけたものであり、それ以前は遊樂部と呼ばれていた。

八雲の気候は道南地方でも特殊気候に属しており、夏期は気温が全般的に低く、日照時間も少なく、北海道有数の多雨地帯となっている。



▲ 八雲町位置図

(17) 慶勝—(18) 義礼—(19) 義親—(20) 義知—(21) 義宣

▲ 尾張徳川家系図(17代慶勝以降)

3. 移住の経過

尾張藩は江戸時代、石高60万石以上を誇る雄藩であり、その所領を治めていたのは徳川御三家筆頭とされた尾張徳川家であったが、江戸中期以降、しだいに將軍家と対立するようになった。もともと尾張藩は御三家でありながら伝統的に尊王の志が篤い藩であり、次第に尾張藩士の間には幕府に対する反感が強くなっていった。

幕末になり全国的に尊王攘夷運動が広まったが、このころ尾張藩内部でも、佐幕派(親幕府)と尊王派が対立していた。とくに当時の藩主慶勝は尊王攘夷の立場をとっていたので、幕府からは警戒されていた。

1867年に大政奉還が行われたが、当時の尾張の藩論は二分されており、尾張藩は新政府と幕府のどちらにつくか旗色を鮮明にはしていなかった。そこで朝廷は

1868年1月、慶勝に対して藩内の姦徒を誅戮し勤王の志を奮起させるよう朝命を出した。慶勝は御前会議を開き、藩内の佐幕派を粛清した。この事件は青松葉事件といわれており、これにより尾張藩は幕府の親藩でありながら藩論を尊王一筋に統一して討幕派につくこととなった。

1869年、新政府は従来各藩が支配していた土地と人民を朝廷に返還させる版籍奉還を行った。これに伴い尾張藩は名古屋藩と改称され、慶勝が知藩事となった。あわせて封建的身分制度の整理を行い、大名・公家を華族、一般武士を士族、農工商の一般庶民を平民とした。こうして形式的には四民平等になったが、実際には華族・士族には家禄支給の特権が残されていた。

1871年には廃藩置県が行われ、従来各藩が支給してきた家禄を明治政府が肩代わりすることとし、中央集権的政治体制が確立されることとなった。名古屋藩は名古屋県となり、初代県令には慶勝が任命された。

1876年、政府は秩禄処分を断行し、華士族の家禄を全廃する代わりに旧禄の種類や石高に応じた額面の金禄公債証書を与えた。これにより華族や上級士族は産をなすことができたが、下級士族は低額の公債しかもらえず没落していくこととなった。

このように政府が士族の特権を剥奪したのは、人口の約6%にすぎなかった華士族に対して政府が支給していた家禄が国家財政の3割以上を占め、大きな負担となっていたためであった。また、徴兵制の導入により武士身分に属するものだけが軍事を担うあり方は否定されることとなり、士族に家禄を支給する根拠が喪失したためでもあった。秩禄処分により、生活に困窮する士族の不満は頂点に達することになる。

困窮士族救済のため、名古屋藩では1870年に「帰田法」を制定し、手当金を支給して士族身分のまま領内に移住帰農させることとした。また、帰農を希望しない士族には「均禄法」を適用して従来の禄高に関係なく一律に50俵を支給することとし、どちらを選択するかは各士族の自由とした。

ところが、実際には帰農を選択する士族が少なかった上に、廃藩置県により各

藩が独自に帰田法を行うことが不可能となり、帰田法は見るべき成果を上げずに立ち消えとなってしまった。また、商業に転じた士族も、その多くがいわゆる「士族の商法」により没落していった。

このような新政府の一連の方針に対して、士族の多くが反発するようになり、不平士族の反乱が相次いだ。これらはいずれも政府軍に鎮圧された。

そのころ、蝦夷地では戊辰戦争で敗れた伊達家など東北諸藩の士族などが次々に移住しはじめており、1874年には屯田兵を募集して開拓が着々と進められていた。このような状況の中で、旧尾張藩主慶勝も失敗した帰田法に代わる新たな士族授産対策として、北海道開拓を検討するようになった。

1877年、慶勝は旧藩士を北海道に移住させることを決意し、3名を北海道に派遣して開拓使函館支庁と七飯勸業試験場の協力を得て約3ヶ月間移住適地の調査に当たらせた。

慶勝は、函館支庁や七飯勸業試験場の勧めもあって、函館から近く移住経費の安い遊楽部を最適と判断した。そこで徳川家は1877年に銀行を設立し、この利息を北海道に設ける開墾試験場の運営費用に充てることにした。翌年1月には「北海道事業担任」を新設し、移住の規模・方法・土地払い下げの申請・経費の確保・移住者の募集などの具体的遂行に当たることにした。移住人の募集は同年2月から開始され、7月に初年度の移住計画がまとまった。

慶勝は1878年5月、開拓使に遊楽部の土地150万坪の無償下付を願い出た。徳川家ではこの土地を初めの2年間は「徳川家開墾試験場」とし、3年目から「開墾地」とする計画であった。6月に開拓使が土地下付を決定したのを受け、7月に移住者の受け入れ体制を整備するため先発隊が遊楽部に向けて出発した。これが尾張徳川家家臣団による組織的団体移住のはじまりであった。

4. 移住のはじまりと八雲村の誕生

1878年5月、北海道移住者(13戸と単身者6名)がようやく決定した。北海道移住にあたり、道路の開削や家屋の建築など、移住者受け入れ準備のため、移住先発隊が編成された。1878年7月、先発隊は海路で函館まで向かい、函館から陸路で

遊樂部入りした。

移住は1878年から96年までの間続けられ、退場した者も含め合計で78戸330余人・単身者29人・幼年者24人の約380人の士族が徳川家開墾試験場に移住した。このうち最終的に独立自営したのは75戸であった。

士族移民たちは遊樂部を墳墓の地とする覚悟であり、移住後ただちに墓地の選定を行った。また、教育にも熱心であり、移住直後から寺子屋形式で児童に読み書きを教え、1879年には徳川家が出費して「八雲学校」が開校し授業が開始された。

1879年3月、徳川家は開墾試験場を「八雲村」として独立することを開拓使に出願して認められ、ここに胆振国山越郡八雲村が誕生した。分離独立にあたり「八雲」の名称を挙げたのは慶勝の意向によるものであり、その命名の起源は、須佐之男命が詠んだ古歌から採用されたといわれている。

徳川家開墾試験場は、1885年に「徳川家開墾地」と改称され、1912年以後は小作制の「徳川農場」に移行した。このうち1885年までは「直接保護時代」、1885年から1889年の「八雲村徳川開墾地郷約」制定までは「間接保護時代」、1889年から1912年までは「保護廃止時代」といわれている。

移住当初は移民の開墾試験場における一切の面倒を徳川家が見ることにし、移住の旅費・家屋建築費・農機具種苗費・米菜料などの貸与などの手厚い保護が与えられた。徳川家が移民に貸与した金額は、30ヶ年にわたり全額を無利子で返済させることとした。

しかし、実際にはこのような保護は、移民の間の徳川家への依頼心を助長させ、農家として自主独立のできる経営をするものは少なく、しだいに退廃の気風が醸成されていった。このため、徳川家は1885年に開墾地諸制度の改革を断行し、移民への保護を削減し、自給自足の見込みがない者は退場帰県させることにした。また同時に「徳川家開墾地」と改称し、今後來る移民には従来のような手厚い保護は与えないこととした。

移民の依頼心を助長するような保護は全廃されたが、共立商社の設立・輪作の奨励・果樹の奨励・牧場の奨励など、士族の独立自営を促進させるための援助はかえって積極的に行われた。

さらに、幼年者を移住させて幼少時より農業訓練を施すことにし、旧尾張藩士族で10歳以上14歳未満の者を1886年より3年間にわたり単身で移住させることにした。こうして24人の子供が「幼年舎」に収容され、農村の労働に親しむよう教育された。この中から将来の指導者を育成するため、開墾費から支出して札幌農学校に入学させた。幼年舎出身者からは、のちに八雲で中心的な役割を担った人物を数多く輩出している。

また、開墾の進捗を図るため1888年には初めて農民を徳川家の小作人として徳川家開墾地に移住させた。当初数年間は愛知県出身者のみを募集していたが、その後他府県出身者も募集するようになった。このため開墾地の人口は急増した。

1889年には「八雲村徳川開墾地郷約」を制定し、これまでの徳川家の植民地的な農場経営ではなく、小作制農場として徳川家開墾地を経営していくこととなった。そして、徳川家が士族に与えていた保護はすべて廃止するとともに、開墾地のことはすべて移民たちにまかせることとし、士族移民たちは徳川家の保護を離れ、小作人として自主自営に入った。

1912年には士族移民75戸の年賦金が完済され、これに伴い士族に土地が無償譲渡され、自作農として独立することとなった。士族に譲渡されなかった畑地や山林は「徳川農場」として、もっぱら小作農業の経営に移った。

徳川農場は戦後の農地改革により1948年にすべての小作人に農地を解放して閉場したが、小作人に解放されなかった山林は徳川家当主を社長とする「八雲産業株式会社」として造林を主体に経営しており、引き続き八雲と関わりを保っている。

5. 移民と農業

徳川家では当初畑作を中心にして、後に水田を開いて田畑の耕作を行い、養蚕を開始する計画であった。士族たちは農業についての知識や経験などはなかったので、開拓使の奨励する洋式農法を勉強し受け入れていった。

しかし、水田稲作は気候や土壌の影響でほとんど収穫を得ることができなかった。このことは田畑を中心とした伝統的な農業により開拓を推進しようとした当

初の計画に打撃を与え、移民の生計自立のための大きな障害となった。こうした厳しい環境に直面して、移民たちはしだいに八雲に適応した独自の農業形態を発達させる必要があると認識するようになった。

八雲の適作物としてまず注目されたのは馬鈴薯であった。馬鈴薯は八雲のような湿潤冷涼気候かつ火山灰性土壌の地でも成長するので、1900年には総作付面積のおよそ3割を占めるようになった。

さらに馬鈴薯澱粉製造を開始し、八雲産の澱粉は「八雲片栗粉」として名声を博し、全国一の高値で取引されるようになった。

1914年に第一次世界大戦が勃発すると、澱粉は一躍重要な海外輸出品となり、価格も急騰した。八雲の馬鈴薯農業は空前の発展を示し、総作付面積の約半数が馬鈴薯となり、連作による連作を重ねて栽培した。八雲には「澱粉成金」と呼ばれる人たちも見られるようになり、空前の好景気は「澱粉景気」といわれるほどであった。

しかし、1918年に第一次大戦が終結するとヨーロッパでオランダやドイツの澱粉が市場に復帰するようになったため、八雲の澱粉は売れなくなり、澱粉価格も大暴落して極端な不況に陥った。澱粉製造事業は一転して不採算事業になり、多くの工場が放棄されることになった。しかも、新たに馬鈴薯に代わる作物を育てようとしても、無理な連作で土壌は痛め尽くされ地力は甚だしく消耗していた。このため離農者が続出し、八雲農業は最大の危機に陥った。

馬鈴薯に代わり八雲の気候風土にもっとも適した農業として脚光を浴びたのは酪農であった。酪農は地力を向上させる意味でも注目され、士族たちが主導して酪農への転換を計ることにした。これ以後飼養頭数は年々増加し、1929年には飼養頭数が2000頭を突破するなど道南を代表する酪農郷となった。

6. 尾張徳川家と移民

尾張徳川家は秩禄処分により有数の資産家となり、当初移民たちは徳川家に深く経済的に依存していた。このため徳川家は旧藩主として移民たちに対して絶大な権威を持っていた。1912年に士族が完全独立すると、移民と徳川家との間の直

接の関係はなくなったが、これ以後も徳川家による八雲への資金援助などは行われた。

第二次世界大戦が終了し、華族制度の廃止・農地改革が行われると、徳川家の財産は大幅に縮小され徳川農場も閉鎖となった。その後も八雲産業社長として徳川家当主は頻繁に八雲を訪問しているが、戦前のような資金援助は一切なくなっている。しかし、徳川家が八雲開拓のルーツであることは変わらず、現在でも敬意を持つ町民は多い。ここでは歴代当主と八雲との関係について考察する。

17代当主慶勝は八雲開拓の祖であるが、高齢のため八雲を訪問することは一度もなく、18代義礼も数回訪問したのみであった。これに対し19代義親は頻繁に八雲を訪問し、士族のみならず小作人や他の町民とも親しくし、多額の資金援助を行ったり、農民の生活改善を提案したりしたので、よき農場主として全町民から広く尊敬されるに至った。第二次大戦後も義親は変わらず尊敬され、1976年に死去した際には八雲で追悼大会が行われている。

徳川家を顕彰する団体として、1915年に士族移民の子孫が集まって結成されたのが和合会である。この会は現在も存続しており、徳川家当主の八雲訪問の際には歓迎会や講演会などを催している。

7. 八雲町における移民文化の形成

士族としての風流のたしなみは移住後もしばらくは続けられた。八雲に移住した士族たちは江戸時代に国学・和歌・俳諧・茶道などを学び、高い教養を身につけた人たちが多かった。しかし、これらは農業で生計を立てていく上では時として障害ともなった。

また、八雲移住後も当初の生活は名古屋と変わらなかったが、八雲での生活は決して楽ではなく、名古屋と変わらない生活は家計を圧迫することともなった。そこで、士族移民一同は1883年に「定約書」を締結して、贅沢を戒めて、質素儉約に努めることにした。八雲ではこの定約書によって故郷の風習は否定され、生活の実情に適応した質素な生活への転換が、徳川家の手によって強力に行われたのであった。こうして徳川家への敬意が残る一方で、故郷の風習は現在ほとんど

残っていない。

食文化についても、現在の八雲には故郷を思わせるような食べ物はほとんど残っていない。方言についても、2代目までは名古屋弁の中でも特殊な武家言葉が話されていたが、現在では消滅し、北海道弁が主流となっている。

これらの理由として、他府県出身の移民の増加も考えられる。当初、徳川家開墾試験場の小作人は愛知出身者のみが選ばれ、八雲は愛知からの移民の集まる拠点の役割を果たしていた。しかし、1897年以降は他府県からの小作人の移住も認め、数年で小作人戸数は倍増している。八雲の各農場の小作人は、1912年には総数744戸のうち約4割が愛知出身者であったが、八雲村全体で見れば愛知出身者の比率は13%程度であり、大多数は北海道の他地域と同じく東北・北陸出身者の子孫が中心である。したがって、愛知出身者の文化は東北・北陸出身者のそれと交わる中で融合あるいは駆逐されていって現在の状況になったものと推測される。

故郷の文化があまり残っていない八雲にあって、現在でも名古屋と八雲を繋げ続けているのが八雲神社であり、1887年に慶勝が明治天皇の勅許を得て、全国唯一の熱田神宮の分霊を祀る神社となった。1934年には慶勝も合祀されている。

八雲は木彫り熊発祥の地でもある。木彫り熊を奨励したのは義親であり、貧しい農民の生活を改善するための手段でもあった。熊彫りは副業として定着し、北海道みやげとして広く定着するようになった。

また、士族移民の子孫たちは、酪農以外にも味噌や醤油の醸造・バター飴製造・行政などの分野にも進出して顕著な活躍をしており、八雲のリーダー的な地位を占めていた。

8. 現在の八雲町

酪農が八雲町の主要産業となって以後、乳牛の飼養頭数は年々増加していった。しかし第二次大戦が激しくなると、男子が相次いで徴兵され基幹労働力がいなくなり、飼養頭数も減少するなど酪農は低迷することとなった。

終戦後も食糧難を切り抜けるために農業生産統制が強化され、食糧増産のために多くの土地が利用されたので乳牛の飼育が困難となり、牛乳の生産量も著しく

減少し、酪農の前途が危ぶまれる状況であった。

そこで八雲の青年酪農家が中心となって、1947年に「北海道酪農青年研究連盟」が結成され、この北海道酪青研はのち全国組織となり「日本酪農青年研究連盟」となった。日本酪青研の会員数は1979年には1万人を超え、八雲町からは2人の委員長を選出するなど、八雲は日本の酪農をリードする地域となっていた。

戦後の八雲は有畜混同農業・副業的酪農から単純化された酪農への転換を行い、酪農の大規模化や土地改良を進めた結果、1956年に「八雲地区集約酪農地域」に指定され、以後八雲の酪農は飛躍的な発展をしていくこととなった。

しかし1970年代後半になると牛乳の生産過剰が問題となり、乳価据え置きや生産調整が行われるようになった。道内では1980年から生乳の総量規制がはじまり、以降生乳の生産は計画された生産量に沿って生産されることになった。

こうした社会情勢や後継者不足などから八雲でも1980年代以降離農者が続出するようになり、酪農家戸数もこの20年間で半減しており、飼養頭数も減少傾向にある。

酪農家戸数の減少は全道的な傾向であるが、小規模酪農家が年々減少しているのに対し、「メガファーム」と呼ばれる大規模酪農家に限れば増加傾向にあり、とくに道東ではメガファームの比率が高い。しかし、八雲では1戸あたりの耕地面積が小さく地価も高いことから大規模酪農には不向きで、新規就農もほとんど見込めない厳しい状況である。

大規模化の中で小規模牧場が生き残るために、八雲では牛に快適条件を与えストレスを防ぎ、品質の良い牛乳を生産することによって大規模牧場との競争に勝とうという努力が日々なされている。

現在、八雲町では名古屋市・小牧市と交流が行われている。小牧市との交流は1982年に20代当主義知が提言したもので、毎年夏冬に行われる児童の交流学習・経済面での交流議会の交流などが現在まで継続されている。名古屋市との交流は小牧市に比べるとそれほど活発ではないが、名古屋市での八雲物産フェアや名古屋大学などの医師による無料の「八雲町民ドック」が行われている。

現在、八雲町民で愛知出身者の子孫は少数派であるが、他府県出身者の子孫であっても、八雲開拓のルーツの地として愛知との交流は全町民的に行われている。

このことは、移住から100年以上が経過し、多くの町民が個々の郷里よりも八雲を「郷里」としてとらえるようになり、その郷里を開拓した人々の出身地との交流を全町民的に行うようになったことを示している。

現在、八雲町でも市町村合併問題が浮上しており、2005年に日本海側の熊石町と合併することがほぼ決定している。現在、合併に伴う新しい町名の選考が行われており、これにより八雲という町名が消える可能性もある。

9. むすび

筆者は当初、八雲町で食文化や方言などで愛知県の影響が相当残っているのではないかと推測していたが、その後の調査で愛知の文化はほとんど残っていないことが判明した。

この理由としては、旧藩士が移住してわずか数年で、華美な生活を改め質素儉約に努める定約書が締結されたこと、生活が苦しく故郷の伝統文化を残す余裕がなかったこと、愛知以外からの移民が増え愛知出身者の割合が低下したことなどがあげられる。また、温暖な愛知で育まれた文化は北海道の寒冷な気候に適応しなかったことも考えられる。とくに稲作の失敗から、稲作に由来する風習の多くは失われていった。

一方、徳川家への尊敬の念が今も残っているのはなぜだろうか。これは徳川という姓の持つ権威にも由来するものと考えられる。

江戸時代、徳川姓は一族であっても将軍家と御三家しか名乗れず、他の分家は原則として松平姓を名乗ることになっていた。このことは徳川という姓が松平一族のなかでも別格の存在であることを示している。

維新後、尾張家は秩禄処分で多額の金禄公債を得て、豊富な資金力を背景にして、開拓事業を推進した。後年、士族が完全に徳川家の手を離れたのちにも徳川家へ敬意を払い続けたのは、開拓初期に手厚い保護を与え自立を促してくれたことへの自然発生的な感謝の念によるものであろう。

戦後は、徳川家にかつてのような財力はなくなり、現在では徳川農場時代の記憶もしだいに薄れてきているが、北海道開拓100年を迎え、各市町村で開拓のルー

ッを伝えようとする動きが盛んになってきた1970年代になると、八雲町も徳川家によって開かれた町としての歴史を郷土学習で教えるなど徳川家を八雲の象徴として位置付けるようになった。しかし、かりに合併問題により八雲という町名が消え、町名のルーツとして教えられることがなくなったときには、町民の徳川家への関心も格段に薄れていくであろうし、愛知との交流にも大きな影響が出るものと思われる。

※ 本稿は、筆者が2003年度に北海道大学大学院に提出した同名の修士論文を大幅に加筆修正したものである。

<文献>

大石 勇

1994 『伝統工芸の再生』 吉川弘文館

大島 鍛

1928? 『徳川農場沿革史』 徳川農場 (北海道立図書館所蔵)

大島日出生

1983 『青年舎』 八雲書房

落合弘樹

1999 『秩禄処分』 中央公論社(中公新書)

加藤英俊

1998 「明治期愛知県から北海道に移住した人々(上)」『もりやま』17:225-286 守山郷土史研究会

北倉公彦

2000 『北海道酪農の発展と公的投資』 筑波書房

新修名古屋市史編集委員会編

2000 『新修名古屋市史』 名古屋市

武田良三

1956 「開拓地農村共同体の展開と特質(一)」『社会科学討究』1:65-92 早稲田大学社会科学研究所

都築省三

1944 『村の創業』 財団法人満州移住協会

徳川農場

1925? 『大正十四年度 徳川農場統計一覧』 徳川農場

1928? 『徳川農場』 徳川農場

徳川義親

1921 『熊狩の旅』 精華書院

1973 『最後の殿様』 講談社

中村英重

1998 『北海道移住の軌跡』 高志書院

林 善茂

1955 「徳川農場発達史(一)」『経済学研究』 5:73-106 北海道大学

1956 「徳川農場発達史(二)」『経済学研究』 6:57-103 北海道大学

1963 「徳川農場発達史(三)」『経済学研究』 13:81-123 北海道大学

北海道編

1971 『新北海道史 第三巻 通説二』 北海道

八雲町史編纂委員会

1984 『改訂 八雲町史』 八雲町役場

八雲町農協四十年史編集委員会

1991 『八雲町農業協同組合四十年史』

横井司馬編

1984 『和合会史』 和合会

若林 功

1964 『北海道開拓秘録』 時事通信社(時事新書)

和合会

1986～ 『八重垣』(和合会報)、創刊号～ 和合会

(はら まこと 日本文化学)